

Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

「宝石に秘められし神秘の力よ、この私に力をよこせ！！私は力が欲しい、強い力が欲しい！！全ての敵を薙ぎ払い、この世界すらも我が手中に収めることができる絶対的な力が、神にも匹敵するような力が欲しい！！！」

「全てが欲しい！！領土も、力も、名誉も、世界も！！この世のあらゆるもの全てが欲しい！！我が野望の声が聞こえているのならばダイヤモンドよ・・・私の声に答えろ！！！」

自らの野望を・・・強欲なまでの野望をダイヤモンドに語りかけながら高々と掲げた途端、ダイヤモンドに異変が起きた。

ダイヤモンドがカタカタと震えだし、表面から光輝く魔力が溢れ出した。光を乱反射し虹のように煌びやかなその輝きは不覚にも美しく誰もが思わず見惚れてしまうほどの輝き方だった。

だがその輝きは徐々に美しさから徐々に離れ、不気味さや怪しさを感じさせる奇妙な輝きへと変わった。誰よりそれに早く気が付いたのはジェットだった。肌で直接ダイヤモンドの魔力を感じているジェットはその輝きの変化に伴い鳥肌が立ち始めていた。怖い・・・あの輝きを見ていると自分の深層心理から深い恐怖の感情が湧き上がる。

その直後、ダイヤモンドが自らの魔力の効果でグスタフの手から離れ、中へ浮かび上がった。そしてフワフワと空中を漂っていると、今度はゆっくりとグスタフの周りを衛星のように周回し始める。誰もがこれから一体に何が起こるのか全く予想もできないまま、その光景を眺めつつ無駄なくらいに時間が少しずつ経過していくのだった。

この時に何かしらのアクションを取り、今のうちにあのダイヤモンドの動きを封じておけばよかったと後悔するのは、これから1時間くらい先の話である・・・。

そして不意にダイヤモンドの動きがグスタフの正面へ来たところで止まった。そして・・・

「・・・？グアアアアアアアアアア！！！」

それはまさに突然だった。突如ダイヤモンドがグスタフの胸へめがけて体当たりをしてきたのだ。しかもただぶつかっただけではない、もしこの現象を見ていた人間全員の視力が正常だとしたら、ダイヤモンドはグスタフと接触した瞬間にまるでグスタフの体の中に溶け込むかのように吸収されてしまったのだ。

ダイヤモンドの輝きがグスタフの体内に侵入する度に失われ、光が完全に消えてしまったころにはダイヤモンドは完全にグスタフの体の中に取り込まれてしまったのだった。

とたん

「グゥ、ぐっ！？グギャアアアアアアアアア！！！！！！」

今度はグスタフの体に激しい変化が現れた。まるで膨らました風船の内側から外へ出ようと突き破ろうとするように、グスタフの体が内側から何か膨大なエネルギーに押し出される様にポコポコと不規則に変形しだした。

何が起きているのか一番わからない本人は相当苦しそうに身をよじり、悲鳴を上げ、暴れているエネルギーを抑え込もうと必死になっているのが見て分かる。だが自分が立っている場所の不安定さが災いとなってしまう、足場の固定されてない窓の冊子のような場所に立って力いっぱい暴れていたらその先の結果など見なくても分かりきっている。グスタフは足を滑らせるとそのまま高い位置から落下、しかも運の悪いことに頭から落下してしまった。

「・・・何が、起きたんだよ？」

「分からん・・・おそらくダイヤモンドが体内に吸収された結果、ダイヤモンドの魔力が暴走したんじゃないのかな？」

「え・・・どういうこと？」

「強い魔力に対する耐性・・・つまりは強い精神力があつた男にはなかったってことだよ」

「見た感じそうっぽいけど・・・それでいいのか？」

「キシシ・・・仕方ないだろ？そういう風にしか小生も見えないんだから」

「なににせよ呆気ない・・・あの高さから頭から落ちたら、助からんな」

早すぎる、且つ面白味もないグスタフの最後の光景に全員の緊張の糸が切れ口からどっと息が吐き出された。

それと同時に進行するように、ドクターがおんぶしていた猫眼も徐々に意識を取り戻し始める傾向が見られた。喉の奥からわずかに声が漏れだし、やや苦しそうに表情をゆがめつつも瞼がプルプルと震えている。

それに気づいたドクターがさっそく眠っている猫眼に呼びかけながら体を上下に優しく揺すると、猫眼の瞼がゆっくりと開かれた。

「猫君、聞こえるかい？猫君」

「んん・・・ニャ、ドクター？」

「そうだよ、気が付いたかい？」

「フニャ～・・・頭が痛いネ、体中も痛いネ」

「あ、姉御目を覚ましたさ？」

「・・・何がどうなってるネ？」

「それにしても何さね・・・新ジャンル裸白衣って思いのほかそそのものがあるさ」

この場の空気になさわしくないアゲートの妄想を爆発させてしまう扇情的な格好にようやく気が

付いた猫眼は、途端に顔を真っ赤に染め上げ悲鳴にも似た奇声を上げながらアゲートを力の限り殴り抜けた。本日これで二回目の全力パンチを受けたアゲートの骨格はすでに人ではなくなっているのではないかと、ジンは密かに心配した。

「ニャアアア！！なんで私スッポンポンヨ！！？？なんでこんな格好してるカ！！？？」

「ちょっ！猫君、小生の背中で暴れないでくれ！危ない危ない！」

「ニイイイイヤアアアアアア！！見ないでええええええ！！」

「落ち着けこのドベが！！」

今までにないほどの羞恥に耐えかね混乱している猫眼の頭に、虎眼の拳骨が炸裂した。頭が首からもげてしまうかと思うくらいに重い拳は一撃で猫眼の混乱状態を解除してくれた。

そこでようやく、頭をさすりながら涙目になる猫眼と傷だらけで睨みつけてくる虎眼の目と目が重なった。

「ニャア！？なんで私がもう一人いるカ！？」

「貴様はあの時一連のやり取りを覚えとらんのか！！」

「いちいち覚えてられる状況じゃなかに決まてるヨ！！」

「だから貴様は単細胞なんだ！！そんなことだから不覚を取ってあんな目に合うんだぞ、巻き込まれる俺の身にもならんか！！」

「シャー！！うるさい脳筋男、何でも体力で解決してしまうような癖があるから脱出にも失敗したのはどこのどいつネ！！」

「なんだと貴様あ！！」

「なによ、やる気カ！？」

何が始まるのかと思えば今度は喧嘩が始めってしまった。しかもこの場合はかなり稀なケースの喧嘩であり、自分自身同士での口喧嘩ときたもんだ。いや、二人は今分離しているところからすればこの場合自分と自分の一人相撲ではなく兄弟喧嘩というのが正しいのだろうか？だとしたらどっちが兄か姉か分かったものではない。

結局この二人の喧嘩は殴り合いにまで発展しかかってきたところでドクターが仲裁に入り、ようやく収まることとなった。

「落ち着いたまえ二人とも、何があったか詳しいことは後日ゆっくりしようじゃないか？」

「フンッ」

「プイッ！」

「・・・まったく。とりあえず今すべきことは・・・男女君、手伝いたまえ」

ドクターは背中から猫眼を下すと、ジェットをひきつけてグスタフの死体の元へ急ぎ足で向かった。何を始めるのか理由を尋ねてみるとドクターの言い分はこうだ。

ダイヤモンドを我々より先に入手していたグスタフが死んでしまった今、ダイヤモンドの所有権はどこにもない。ならばさっさとこちらで手に入れてしまった方が得策である。いつぞやのオニキスのように宝石の中から何かとんでもない物が出現してしまう前に回収してしまいたいのだが

生憎ダイヤモンドはグスタフの体内に吸収されている。こうなれば直接死体を切開して宝石をいただく、ということだった

決して間違っただけではなかったが、死体を荒らすような行為にジェットは少し引き目を感じている。何より死体を解剖する様子を間近で見て、しかもその手伝いまでさせられては10日は肉を食えなくなる自信すらある。

しかし駄々をこねたところで聞き入れてくれるドクターではない、ジェットの手を引きグスタフの元へたどり着くとさっそく準備を始めた。

用意したのはハサミとメスと清潔な布と手袋。ドクターがグスタフの体を切り開きジェットが炎で明かりを確保すると同時に、作業しやすいように直接手で切開面を固定する。焼死体ならここ最近見慣れたものだがこういった本格的な姿態の相手をさせられるのかと思うとジェットは想像しただけで顔がゲッソリしてきた。

対して何の躊躇も無いドクターは黙々と作業の準備を一人で進めている。作業しやすいようにグスタフの死体を仰向けになるように転がし、袖をまくり手袋を装着するといよいよその手にメスが握られた。

「よし、そろそろ始めようか。男女君？」

「へいへい・・・」

覚悟を決めたらしく、ジェットも手袋と一緒にマスクも装着し準備はOK。

杖の先端に小さな火を灯して手元を明るくするとメスがギラリと怪しく輝き、ジェットの恐怖心を煽った。

徐々にメスがグスタフの胸に近づき、皮膚に刺さりだした時・・・

ギョロツ！！

全ては想定外の出来事、死んでいると完全に断定していたグスタフの体が一瞬跳ね上がったかと思うと、折れている首が持ち上がり瞳孔の開いた双眸が二人を睨んだのだ。直後ピクリと動いた右腕が振り上げられ、状況をまだ飲み込んでいないドクターの顎を正確にとらえた。不意を突かれたドクターは前触れの無い攻撃に戸惑いながら床の上で縦に1回転して倒れ、ついでにグスタフの拳は真上で明かりを照らしていたジェットの杖を真っ二つにへし折ってしまった。腕のみに留まらず、足まで動き出すと左足の裏がジェットの腹を正面から貫き、そのまま吹き飛ばしてしまった。

そのありえない光景に一同は仰天し、その瞬間何が起こったのかも理解できぬまま・・・何も出来ぬままだたひたすらに両目を丸くしてしまった。

更に目を丸くする以上に目玉飛び出してしまったのが次の異常現象だ。死んでいるはずのグスタフがムクリと、考えられないことだが起き上がったのだった。それだけではない、今度は両足を使ってしっかりと立ち上がって見せた。最後にもう一度驚かされたのがあの折れた首のこと。人間として生きるのなら絶対に向いてはいけない角度まで曲がってしまっている首を、あろうことか両手を使って正しい位置まで矯正し固定、左右に揺らしながら微調整するとへし折れた首の骨は元の位置に再び固定されてしまった。

「・・・クククク・・・フハハハハハハハ！！・・・ハハハハハハハハ！！」

カール・グスタフ、完全復活の第一声はけたたましい歓喜の叫びだった。上体を弓なりに大きく逸らし、天へ向かって咆哮するかのよう豪快な雄叫びだった。そして同時にそのグスタフの喚起する笑い声が部屋中に反響し、木霊し、ジン達の全身まで強く震わせる。

耳の奥を突くたびにジンの背中がゾツとなり、全身の産毛が逆立つような言い知れぬ感情が込み上げてくる。当然それはジンのみに限らずその場にいた全員が・・・今殴り飛ばされたドクターとジェットも感じている。

今までにないほどの不安感と恐怖心、絶望感。指先がグスタフの声に共鳴するかのよう小刻みに震え、自然と両手から握力が消えてしまうかのような脱力感さえ押し寄せてくる。首筋から冷や汗が流れ落ち、じっとりと汗ばむ背中が嫌なくらいに気持ち悪い。

「ハハハハハハハハハハ！！！！手に入れた・・・ついに私は手に入れたのだ！！絶対
の力、誰もがひれ伏す力、真の最強！！私こそが本物の強い兵士となったのだ！！」

「いや違う、私は兵士などではない！！兵士とは主君に使われて何ぼの存在、私は断じて
違う！！兵士を、人を、国を、世界を、この世の全てを我が物とし全てを統率する奇
跡の存在！！私は・・・私は神になったのだ！！！！ハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！
」

グスタフの喚起は止まることを知らず、ついに自身のことを神とまで呼び始めた。普段の一行で
あればこのような男を見た途端白けた視線で「痛い人」を見るような冷ややかな感情を抱いてし
まうのだが、今日はそうもいかない。

神・・・あまりにも表現が痛すぎるがこの場合決して的を得ていないとも限らない。ダイヤモンド
の持つ強力な魔力を何の修行もしていない人間がいともたやすく掌握し、完全に制御している
。魔術文化の歴史を持つラプチナ国民から見れば絶対に考えられないような異常現象なのだが、
しかし間違いなくグスタフはダイヤモンドの力をコントロールしている。その証拠として人間な
らば死んでいる状況下の中からでも不死鳥のように蘇り・・・不死鳥などではない。奴はまるで
殺しても死なないゾンビのような存在に文字通り生まれ変わったのだ。

「へえ、タダで帰してくれとは言わねえよ・・・せめて土産もくれるのかい？」

「貴様らには冥途の土産ももったいないわあああ！！！」

突然グスタフの両腕が異常なまでに、そしてグロテスクなほどに発達し、肩から指先にかけて身に着けている服を破きながら筋肉が盛り上がると、床をひと蹴りしただけでジン達の間合いまで急接近してきた。

一瞬反応の遅れたジンの代わりに虎眼が迫りくるグスタフの拳を受け流すと、そのまま拳は床を貫いた。

違う、間違えた・・・

ガシャアアアアアアアアアアアン！！！！

アゲートでさえ破壊に手間取っていたあの強固な鉄の床を、あろうことか一撃で破壊し尽くして見せたのだった。床を形成していた10数枚の鉄板がたったの一撃で全て捲り上がり、グスタフが空けた穴を中心に部屋全体がアリジゴクのような形状を成し全員が悲鳴を上げながら穴の中に落とされてしまった。

砂時計の砂のように、順番に床下の部屋まで落とされると、ジンは一瞬グスタフと視線が重なった。それは今まで見たことの無い目をしているように見えた。獣でも人間の目ではない、それはまさに弱い存在を食いにかかる捕食者の目だった。

それに気が付いた途端、自分が捕食者側であることを直感してしまった瞬間、ジンは自然と声を出していた。

「逃げるぞお前ら！！！！」

敵前逃亡、敵に背中を向ける、シッポ巻いて逃げる、生き恥をさらす、背中を見せるは男の恥、表現方法はいくらでも湧いて出てくる。

全てはジンの独断と直感から生まれたまさに必死の指示。「必ず死ぬ」と書いて「必死」とはよくできたものだった。このままではまさしくジン達は「必死」になる。それを未然に防ぐためにとる行動は逃げるしかない。

逃げとて兵法の一つ、そう自分に言い聞かせながらジンは走り出した。後を追うように虎眼が、ジェットが、ドクターが、猫眼が、そしてアゲートが、ジンの背中を追うように走り出した。一行はこの旅始まって以来、これが初めての逃亡という策だった。正直悔しいと言えば悔しいに決まっている。自分たちはそれぞれ力があると信じてここまで来たのだが、初めて魅せられてあの力の前にこの力では到底太刀打ちできないと知った。

自分たちは弱い・・・だから強い物から逃げるしか方法は残されていない。真っ向から戦うなど完全に無意味だと分かってしまったのだから。

しかしジンは思う、この建物の中からどうやって逃げたらいいものか？アゲートが掘った穴から脱出するか？しかしそれでは間に合わない、廊下を走ったり階段を下りたり、ましてやいちいち扉なんかくぐりながら逃げていては間違いなくラチが開かない。もっとシンプルに、一瞬で外へ逃げる方法・・・。

・・・やはりあれしかない、リスクが高すぎるがこれしか方法はない。

「ジ、ジ、ジンン！！オレっち達これからどうするさ！？」

「これっきゃねえ・・・これっきゃねえだろ！！」

ジンは意を決し全速力で駆け出した。正面廊下の突き当たりにあるあの窓、最も効率的な逃走口はここしか考えられない。ジンは剣を抜き「交響曲」を発動すると、発生した真空の刃が窓ガラスを切り裂き一筋の大きな傷をつけた。これでこのガラスの強度はもろくなり、一撃で破壊することが適う。

「正面だ、飛び込めえええ！！！！」

ジンのとっさの呼び声に応ずるように全員が廊下の床を跳躍、壊れた窓ガラスに全員で体当たりした途端窓ガラスはいともたやすく破壊されてしまった。

この窓から外へ逃げる、ジンの考える逃走手段はこれしかたのけなのだが・・・問題はこれから先、いったいどうやって逃げればいだろうか？

外へ出た瞬間思い出す、ここはこの建物のほぼ最上階にして地上より上空800m強。雲すら眼

下に広がる天空の城から飛び出した直後に起こる自然現象はたったひとつ・・・

「何もできなくてごめんヨドクター！」

「畜生！！なんでこんな目に合わなくちゃならねんだよ！」

「諦めるな！！まだ地上は遠いんだ、きっと何とかなる！！」

「ああそうだな、オレも切にそう願いたいけど・・・実はもうヤバイかもしれない！！」

何とか現状を打開することばかりを考えていたせいで忘れていたが、この脱出作戦最大の盲点が今ジンの手の中で悲鳴を上げていた。

アゲートの鎚はこの程度なら問題ないだろう、虎眼の履いている靴だって鉄を仕込んでいるからきっと何とかなるかもしれない、猫眼はドクターの白衣以外一糸たりとも纏っていないから仕方ないとして、ドクターとジェットに至っては無問題、最大の問題はジンの剣の方だった。

剣の強度を全く計算していなかったせいで、実はさっきから石やらガラスやらを切り裂いていく過程で剣が悲鳴を上げて破片がバラバラと散らばっていた。刃は完全に欠け毀れボロボロになっているし、根元にはヒビが入っている。このままでは長い時間持たな・・・

バキンッ！！

とか言っているうちにとうとうジンの双剣が留金からバッキリ折れてしまった。しかもそのせいで垂直に保っていたバランスが崩れ一行は再びバラバラに空中分解してしまった。魔人の腕も虎眼の足もアゲートの鎚も届かない距離まで一行は弾き飛ばされてしまった。

「しまった！！」

「ぎゃああああああ死ぬさああああああ！！！！」

「いかん、このままでは！！」

空中で1回転しながら地面を見た虎眼の目測が正しければ現在いる場所は上空300m、ある程度減速できたとはいえこの高さで落ちたら間違いなく死ぬことができる。減速も着地の手段ももう残されていない、絶体絶命のピンチだった。

「・・・ちい、できるだけ使いたくなかったがこれも人命の為致し方なしか！」

ここでドクターが突然背中から猫眼を払い落とした。そんないつものドクターからは考えられないいきなりの行動に猫眼は泣きながら突き放される中、ドクターは手持ちのトランクの中から何かを取り出した。

それはラプチナに伝わる骨董的魔術道具の一つ、「金剛杵」というかなり古いタイプの杖だった。それを見た瞬間ジェットは両目を丸くした。片手で持てる小さな杖の両端には魔力を増幅させることのできるマジックアイテム「魔皇石」をセットしており、ドクターがそれを使うと2つの魔皇石がドクターの魔力に呼応し淡く輝き始める。

「ウムムムムムム・・・喝っ！！」

両目を見開き全身から魔力を開放するとその魔力が金剛杵に吸収され、直後魔力は魔術となって再放出された。

するとどうだろうか、放出された魔術は青白い輝きと共に空中を旋回、その直後今度は一行の全身を凍えさせるような極めて冷たい風が襲いかかった。それだけではない、冷氣は空中に漂うわずかな水分を一つ残らず凍りつかせると、一行の眼下に突如氷の巨大スロープが完成されてしまったのではないか。

何が起こったのか訳の分からないまま一行が氷の上へ落下すると、次は螺旋状に渦を巻く氷のスロープを滑り降りてゆくのだった。

地上から残り100mを切ったところで巻き起こった奇跡に感謝をしながらゆっくり落ち着いて安全に落下をすると、全員は最小限の痛みとケガだけで何とかそのまま地上に着地することが叶ったのであった。

「いてててて・・・助かったさあ」

「これはまさに奇跡のそれに近いな・・・やれやれ」

「ドクター！！テメエなんでそんな物持ってやがんだ！？確かそれって地元じゃ歴史的価値から国ほ」

「ウエエエエエエエン！！ドクターにポイ捨てされた―――！！」

「すまなかったよ猫君、ああでもしなきゃ助からなかったんだ・・・勘弁してくれたまえ」

「そうさねドクター！！てか今の何、もしかしてドクターの魔術さ！？」

「それだよ、アタシもそれをツッコミたかったんだよ！！」

「キ〜ッシッシッシッシッシ」

ドクターのおかげで命を拾ったのも良かったし、猫眼がギャンギャン泣いているのも今は無視して、とにかく今のドクターの行いについてアゲートとジェットが食いにかかった。

ドクターは魔術を使えるという事実、だがドクターが魔術を使えるというのは今更考えてみればおかしいことではない。ドクターはすでにジャック・ザ・リッパーという魔人を召喚できるほどの魔力を有している。それだけの力があるなら魔術など使えて当たり前、今までメスを武器にしているところばかりに目が行ってしまっていたせいでその可能性をハナから斬り捨てていたのかもしれない。

ならばなぜ今の今まで頑なに魔術を使わなかったのか？それが不思議でならない。

本人曰く・・・

「キシキシ・・・だって魔力を使うと疲れてしまうではないか？」

・・・とのこと。呆れてものも言えなくなってしまった。使えないのではなく使わなかったことに対して注意の回らなかつた方にも責任があるとだけ言い残し、ドクターは泣きじゃくる猫眼の元へ急いで行ってしまった。

・・・と、この話についてはまたあとで討論するとして、当面の問題として一番頭を悩ませているのはジンである。剣士として大切なエモノを二本同時に失ってしまったことで、ジンはこれから先戦う術を失ったも同然の状況だった。

加えてグスタフの件、ここにいつまでも留まっていたは時期にアイツが追い付いてくる。急いで武器と車を調達しこの場を離れなければならないが、生憎この町には武器屋がない。フェイファ一軍の政策の一つなのかこの町の中では武器の売買は禁止されており、アーウエンの西地区には武器刀剣の卸業者が一人もいない。武器を手にとって住民が反乱を起こすことを未然に防ぐためにとったの策なのか、実に用意周到な政策である。そして今のジンにとってこの状況が最も最悪のパターンに入っていることは言うまでもない。

(残ったものは柄と鞘だけ・・・クソ、こんな折れた剣でこれから先どうすりゃいいんだよ?)

「・・・ジン、俺達が全力でサポートに回る。お前はここから脱出した後に武器を手に入ればいい」

「そんな悠長なこと言われる場合かよ！対策は少しでも急がねえとならねえのに・・・」

「ジン、オレっちの拳骨ハンマーの柄でよかったら貸すさ？」

そう言ってアゲートは恐る恐るジンの手元へ自らの鎚の取っ手を渡してきた。気持ちはありがたいがこういった鉄棒を操る技術をジンは体得していない、ゆえに相性が悪いのでその心遣いを丁重に断った。

しかしそうなる、どうしたものだろうか？ジンにだってプライドはある、まさか本当にこれからしばらくの間虎眼たちに守られる様に生活をするのは是が非でもお断りだ。どうしたらいいものやら？

「・・・ヤッパがないと不安かい、メガネ君？」(ヤッパ→刀剣)

「そういうんじゃねえよ・・・」

「フウ・・・そんなに欲しいなら、いっそ盗んでしまえばいいじゃないか？」

「・・・・・・・・え？」

「忘れたかい？今この街で大きな展覧会をしているじゃないか」

「展覧会・・・・・・・・あっ！」

思い出した、今西地区の大型多目的ホールで「世界の武器・防具展」なる催し物をやっている。あそこに行けば必要な装備を整えることが可能だ。虎眼やらダイヤモンドやらグスタフやらで頭

の向こう側に押しつけていた記憶が蘇り、ジンの表情にも余裕ができた。

どうせ大量に人殺しをしている身だし、展覧会を荒らして使えそうなものを数点失敬したところでそれこそ「今更」な話だ。

犯罪行為にはすっかり慣れているし何の問題もない。これから行く場所が決定すると急いで立ち上がり、一同は大急ぎでアーウェンの西地区へ向かい走った。

ヒュウウウウウウ・・・・ **ドシイイイン！！！！**

ほんの数十秒前までジン達が立っていた場所に、隕石が降ってきた。落下地点となった地面には巨大なクレーターが形成され、その中心に立っているのは隕石などではなく・・・ダイヤモンドで肉体を強化したグスタフだった。あれからジン達を追うために同じ窓からここまで落下してきたのだが、ここまで追いつくのに意外と時間がかかってしまい正直驚いている。連中の姿も影もどこにも見当たらなかった。

ふと両足にわずかな痛みがあることを思い出し、チラリと確認してみる。腰から下の下半身がグチャグチャに変形し、骨格も筋肉もまるでバネのような形状を成し「人間の脚」ではない何かに変形していた。

しかし今のグスタフには詮無きこと。下半身全体に気合を入れると体内のダイヤモンドが反応し、魔力が放出され傷ついた下半身のいともたやすく元の形に戻ってしまった。ダイヤモンドの効果は肉体の強化の身に留まらず、激しい回復能力まで備わっているようだった。

そのことを理解すると、グスタフは今一度微笑んだ。強烈なくらい不気味な笑みに子供が見たら一瞬で失禁して気絶してしまうことこの上ないだろう。

「なんだ、何が起きたのだ！？」

「分かりません、外から何か大きな音が・・・」

グスタフの背後から複数人の声が聞こえた。クレーターから脱出し振り返ると、建物の出入り口に自分の部下たちが集まっていた。今の大きな音を聞いて何が起きたのか確かめに来たようだが、彼らは音を発生させた張本人を見た途端驚愕した。

「そ、総統閣下！？このようなところで一体何を？」

「これは一体何が起こったのでありますか！？」

「わあ閣下！！そのお姿は一体何ごとでありますでしょうか！！」

「・・・・・・・・ピーチクパーチク煩い人間風情が、神の御前で何を騒ぐ」

グスタフは自分を見て騒ぎ出す部下たちを目の前にした途端、激しく虫唾が走るような気分になる。同時に欲してしまいたくなる。

何を欲しているのかわからない・・・ただ欲しい、アイツらを見ていると無性に欲しくなる。空腹にも近い欲求が高まりに高まり、その衝動を徐々に自らでコントロールできなくなってしまう。

。

おまけ

今回使用したキャラクターの名前の元

アーウェン→アーウェン37（リボルビング・グレネードランチャー）

カール・グスタフ→カールグスタフ（84mm無反動砲）

フェイスラー・ツェリザカ→Pfeifer Zeliska（史上最強の拳銃）

正直かなり危険な銃火器の名前をそのまま引用しました。

詳しくは検索してみるとすぐに出てきます・・・凶悪さが

ジリリリリリリリリリリリリリリ！！

「火事だああ、火事だあああ！！」

「表で火事が起こってるぞ！！」

「逃げろ、避難口はどこだ！？」

「押さないで、落ち着いて避難しろ！！」

建物内は大パニック状態だった。ここはアーウエンの西エリアに建っている大型の多目的ホール、車や衣服、雑貨等の展示即売会から映画の放映、美術品などの展示鑑賞会、さらには子供の集会所から大きなパーティーまで何でもござれをコンセプトとした市民憩いの場。

本日はこの会場を使って普段この街では目にすることのできない様々な用途の武器と防具を展示して鑑賞をする「世界の武具・防具展」を開催している真っ最中だった。実際に本物の刀剣類から鞭、打撲武器、盾、鎧などを展示しその展示物が持っている魅力を見て回るのが今回の目的。この展示物を売ることはできないが、物販ブースには殺傷力の無いおもちゃ程度の武具を販売しお土産としている。

この企画は本来最大手武具メーカー「グングニエル」の協力の元開催される予定だったが、数日前に発覚した店舗側の違法経営の取り締まりにより計画は白紙撤回、急遽その他大手小手様々な武器販売商店へ声をかけ今回の開催に間に合わせる事ができた。

一時は開催そのものを見送るとも考えられたが、企画主催者側の強い要望に負けてしまい開催に至った。物騒なこの世界の情勢に対してもっとも簡単な身を守るための道具を一切目にできない市民の為にせめて一度でもいいから武器の持つ美しさ無骨さなどの魅力を見て、知ってもらいたかったとのことだ。

そんな会場の外では、今火事が起こっていると大騒ぎになっている。自分の命の保身ばかり考えてがむしゃらに走り回る観覧参加者、混乱を必死に食い止めようと奮闘する係り員たち、とにかく建物から離れさせようと誘導する軍所属の警備員連中、消火器片手に現場へ急ぐ消防班。

火事の火元は建物の敷地内にある中庭にそびえる大きな樹木。この土地で植物を育てるのは至難の業であり、ましてや樹木など生える土など存在しないのだが、ここでは環境を徹底的に整えて何とか木を一本育てることに成功したこの街のシンボルのようなものなのだが・・・それが今燃えている対象物だった。

威勢よく燃えているこの土地に一本だけの大木も、こうなってしまうのはただの薪に等しい。多少口惜しそうにしつつも15人の消化部隊が一斉に消火器、及び消火栓のノズルを燃え盛る炎へ向けいざ消化！！

の直前に全員がほぼ同時にその場で倒れてしまった。うつ伏せに倒れた一同の背後には、虎眼を始めとしたジン達一行の姿がある。そしてその最後方に立っているジェットがパチンッと指を鳴らすと、メラメラと燃え盛る炎は一瞬で鎮火してしまった。

この騒ぎの原因を作ったのは言うまでも無くこの連中である。完全な人払いを目的としジェットの魔術を使って簡単なボヤ騒ぎを起こしてみれば、案の定観覧者は全員会場から姿を消してしまっただけで済んだ。呆気ないほどに作戦はうまくいった。炎に気を取られていた消火班の連中は虎眼

の当身で簡単に気絶してしまい、気がついても騒ぎを起こさないようにアゲートたちの手で猿轡を嚙ませたうえで縛り上げ、そのまま倉庫の中へ放り込めば準備は全て完了。

「5分後に正面玄関に集合。小生は猫君と一緒に車を調達してくる」

「ついでに私の服もネ」

「俺達はここで装備を整える」

「こんな所に代わりになるようなものなんてあんのかよ？」

「探せばあんだろ？何でも揃ってんだ」

「よっしゃ、レッツパクリタイムさー！！」

一行はそれぞれの目的を成すために散会した。ジェットは破壊されてしまった愛用の杖の代わりに探しに、虎眼はアゲートを引き連れて使えそうな装備品の搜索、ジンは新しい武器の調達、ドクターは移動の足、猫眼はいい加減服を探しに、といった具合だ。

あちこちの壁に立てかけられている案内看板に従って館内を走り回り、ジンの目当てである刀剣類の展示コーナーにようやく着いた。そこでジンが見たのは、簡単な敷居で小さく区切ったスペースの中にこれでもかと言わんばかりの多種多様な刀剣類がゴロゴロ展示されていた。

ジャマダハル、ダガー、ククリ、エストック、クレイモア、ファルシオン、レイピア、カトラス、フォールデングナイフ、シースナイフ、サバイバルナイフ、はては木刀に銃剣まで・・・思わず本来の目的を忘れて見入ってしまいいたくなるほど豊富な品揃えだった。これだけ揃ってればそんな所そこらの武器屋なんか目にもくれそうにない。

だが今回はそうも言っていられない、ジンは我に返ると急いで目的の剣を探しに走った。目指すは愛刀バスタードソード、それも2本一対セットでだ。目的の品を目指すまでの間のついでにその他の刀剣にも目を配り、気になるものを見つけては手に取って見たがなかなかしっくりくるような品は見つからなかった。

ついでの話だが、ここでジンは初めて知った。「剣」と定義された武器は主に斬ることより突くことを前提とした刺突力のある両刃造りの武器を指し、「刀」とは斬ることを主観とした片刃造りの武器を指すと。今まで愛用してきた愛刀はこの場合「剣」になる。

そんなことはさておき、走り過ぎてしまいそうになりつつもようやく念願のバスタードソードを見つけることができた。手にとって軽く振り回してみると、今までの愛刀より少し重いがあまり気にしないことにした。

ただ一番気になることが一個だけ、残念ながらこの剣は一本しか展示されていなかった。途方に暮れてしまう前に辺りを見回し、もう一本ちょうど良さそうな物はないかと物色していると・・・面白いものを見つけた。

展示用プレートに記載されたこの武器の種類は「打ち刀」。バスタードソードよりも細身で反りの大きい刀身、峰と刃の異なる光の反射から生まれる美しいコントラスト、刀に打たれた銘は「山城大掾藤原国包」とある。

妙にひきつけられる魅力に身を委ね、手にしていたバスタードソードを捨てるとその刀を手にとった。漆塗りの鞘に刀身を収め、一気に引き抜いてみると、シャンツと耳にも心地よい風切音がした。

この瞬間、ジンは直感的に思う。いつもの剣よりこの刀の方はよっぽど塩梅がいい、と。さっそ

く新しい刀を腰にぶら下げ、もう一本必要になる武器はすぐそばにあった「九曜拵え」という刀を手に取り反対の腰にぶら下げた。

やはり2本ぶら下げている方が落ち着くのか、ジンは満足そうに笑みを浮かべるとさっさと正面玄関まで帰ろうと急ぎだした。

ドカアアアアン！！

突如、目の前の壁が破壊されポツカリと大きな穴が開いた。反射的に進む足を止め一歩引きながらさっそく手にした刀を握り、これからあらわれようとする何者かに注意を払った。

「・・・貴様か、ここで何をしている？」

穴の奥から現れたのは予想の上に行くような意外な存在だった。大柄の体躯にフェイファー軍の制服で身を包み、帽子も目深く被ったこの男は、あの時ジン達をグスタフの元まで案内したあの鉄面皮男だった。

鉄面皮は拳に付着した埃と小石を払うと、そのままゆっくりとジンの元まで歩いてきた。無表情のままこうやって迫られてみると、意外と怖いものだと不謹慎ながら感じてしまった。

「テメェこそこんな所に何の用事だよ・・・女とデートの待ち合わせかい？」

「騒ぎを聞きつけてここまで来たが、都合がいい。総統閣下の命令により、貴様を拘束させてもらう」

どうも相手はやる気満々らしい、逃がしてくれる気など微塵もないと見た。集合時間には少し遅れてしまいそうだがここはこいつを先に始末した方が良しと見て、ジンもさっそく鞘から刀身の留金を外した。

ジリジリとお互いの間合いを気にしながら二人は睨み合い、どうやって先手を決めようか模索している。先に動いたのは鉄面皮、彼はジンと10mの間を保ちながら右腕をそっと正面へ突き出した。

すると直後、ジンは目の前の光景に驚愕する。鉄面皮の手首がまるで輪切りにしたかのように垂直に割れ落ちた。それだけでなく、断面の手首からは大きな銃口が顔を覗かせガシャンッ！とよっぽど人間らしからぬ音を立ててジンの顔へめがけて照準を合わせた。

背筋がゾクッと震えあがり、ジンは直感で真横へ跳んだ。

ダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

こういった場合の勘は異常なほどによく冴える、銃口から凄まじい量の弾丸が発射され、ジンを襲うのだった。横っ飛びで致命傷は回避できたものの、避けきれなかった分の弾丸はさっそく手に入れた刀で弾き、切り落とし、切断することに成功した。

振った瞬間、今まで愛用してきた剣では味わえなかった異様な軽さに驚かされ、そして高速回転する弾丸を一刀両断するその切れ味に称賛する。いいものを拾ったものだと自分を褒め、着地と同時に足をバネのように弾ませ一気に鉄面皮との距離を詰め自分の間合いに持ってこようとした。だが直後、今度は鉄面皮の左指がバチバチッ！という危機感を覚える音と共にわずかに光り輝

いた。

それは間違いなく電流である。迫りくるジンに対し鉄面皮はまっすぐ左腕を伸ばしジンの腹へ向けて抜き手を繰り出すのだった。

異常過ぎる目の前の光景に混乱しつつ、攻撃の手を守りに変え刀の峰で鉄面皮の左手を弾き返した。本来こんなことをすれば間違いなく指を骨折させることができるのだが、あろうことか鉄面皮の手からは金属同士が激しくぶつかり合うガキィン！！という音と共に弾け飛んだ。

おかしすぎる、あまりにも不自然な現象に戸惑いを隠せず一度距離を離して改めてあの鉄面皮を見直した。右腕から出現した謎の銃口、意味不明に放電を繰り返している謎の左手・・・自分の身内も大概だが、この男の対外過ぎる・・・ただの人間ではないということだけよく分かった。

「・・・随分珍しい腕を持ってるのな。何なんだそりゃ？」

「・・・人体の機械化手術をこの身に受け、我が体は人間を超越している。私はいわゆるサイボーグと呼ばれている兵士だ」

サイボーグ・・・全く耳に慣れない言葉にジンは困惑する。ようやく分かるのは機械化手術という言葉の意味だけ。総合すると、あの鉄面皮の体は人間としての部分は少なく、体が金属製でできた機械人間ということであっているだろうか？

まあそんなことはこの際どうでもいい・・・いやよくないかもしれないが、余計なことを考えるのはやめにして目の前のことに集中しようと思いを引き締めた。

が、その集中力はすぐに無駄な労力と化するのだった・・・

ガッシャアアアン！！！！

思わず目を丸くした。あの鉄面皮の背中から腕が伸び、ドテっ腹を簡単に貫通している。背後から鉄面皮を攻撃したようなのだが・・・問題はその人物だ。

完全に記憶の向こうに追いやってしまっていた・・・忘れてはならなかったはずなのに、自分の頭では分かっていたはずなのに、思わず現実から目を背けて都合のいい記憶だけを上塗りして重要なことを忘れようとしていた。

腹から延びる腕の持ち主はあの男だった。忌々しいあの悪夢を現実の世界に持ってきたような、あの男だった。

グスタフ・・・カール・グスタフその人だった。もうこんなところまで追いついてきてしまっていたのかと思うと自分の思考がどれだけ浅はかだったかが思い知らされるようだった。

だが、このグスタフはすでに自分の記憶にあるグスタフとは姿が変わっている。肌の色が鋼のような鈍々しい光沢をもっている、全身が元の姿より二回りは大きくなっている、両腕など丸太のようだという表現を通り過ぎてまるで大木のようなだった。何をしながらここまで来たのか知らないが、きっと良からぬことには違いないだろう。

腹を貫かれた鉄面皮は一気に動きが鈍くなり、錆びたブリキのおもちゃのようなガタガタした首を回しグスタフに視線を合わせた。

「s・・・総tう・・・閣っk・・・？」

「邪魔だ」

グスタフは短くつぶやくと、突き刺さった腕をそのまま横薙ぎに振り払うと、鉄面皮の体はいともたやすく真っ二つに両断されてしまうのだった。体の断面から普通の人間なら持っていないような見たことの無い機械やらネジやらオイルやらが辺り一面に散乱し、足元を広く汚した。

「・・・追いつめたぞ、小僧」

「歓迎する気なんかさらさらないけどな・・・てかテメエこそ何なんだその体、イメージチェンジにしては頑張りすぎじゃね？」

「ククク・・・これもまた偉大なるダイヤモンドの力だ。この身体の中に直接人間を取り込み、肉体の一部にすることができた。さらに鉄を取り込むと今度は肉体の細胞が金属のそれへ変わり、生身の体にして鎧をまとったこととなる。」

なるほど、こいつは厄介だ・・・厄介な上にイカレている。ついに犠牲者が出てしまったようでジンは内心で怒りが込み上げてきた。

しかしそれに勝るのがこの恐怖心、さっきから強気な態度を取っているつもりでいるのだが、正直グスタフの姿を確認したときから手の震えが止まっていない。しかも最悪なことに今この場にいるのは自分一人だけ。自分の実力だけではどう考えても勝ち目なんか万に一つ・・・否、京に一つあるかどうかすらも怪しい。あの男は、それほどまで危険だからだ。

「私は神となったのだ。この世の皆が私の前にひれ伏す・・・世界が私にひれ伏す・・・全てが私の物となるのだ・・・フハハハハハハハハ！！」

「・・・馬鹿馬鹿しい、神様なんてものはこの世にはいない。当たり前すぎる話じゃねえか」

「その通り、今までこの世に神などいない、故に私が初めて本物の神となり、この世界を支配するのだよ！！」

「テメエは神なんかじゃねえ・・・正真正銘の、テメエはただの化け物だ」

普段通りの調子で生意気な口を叩くと、グスタフの表情筋がピクリと痙攣を起こしたのが見えた。

やがて二人の間には、長い長い沈黙の時間が訪れた。さっきまであんなに饒舌にしていたグスタフも口を閉ざし、あからさまに機嫌の悪そうな顔をしながらジンを黙って睨みつけている。その時間がジンにとって嫌なくらい長く感じてしまい、毛穴から少しずつ汗が噴き出し始めてきた。強気な姿勢を保つのも一苦労なもので、あまりに長いこの沈黙にジンは今の自分のセリフに嫌悪感すら覚え始めてきた。

「・・・初対面の時から気にかけていたのだが、貴様人に対する礼儀という物が欠如しているようだな？何様のつもりで一体誰に向かって生意気なセリフを吐いているのだ？」

「オレはオレだ・・・そしてテメエはさっきも言った通りただの化け物、それ以上も以下もない。オレは化物に対して丁寧な口ぶりで会話するような教育を受けていなくてね、これでいいものだ」と心底思っている・・・何か質問でもあるか？」

「・・・本格的に指導が必要なようだな」

少し気を逆なでしすぎたかもしれない。グスタフは足元に転がるすでに息絶えた鉄面皮の頭を踏みつぶすと、その剛健な右腕を横に伸ばした。今度はどんな手品を見せてくれるのかと内心不安に思いながら見つめていると、右腕の表面を覆うようにナイフや刀剣の刃がニョキニョキと伸びて出てきたではないか。

先ほどグスタフは鉄を身体に取り込んで体が硬くなるような話をしていたが、なるほど納得だ。この会場には鉄が腐るほど展示されている、その辺の物を吸収していたらいつの間にか体が硬くなってしまったとかそんなところだろう。

おまけにその取り込んだ物質の特性をそのまま操り、武器として使用できるとは・・・ダイヤモンド、これまたとんでもない力を与えたものだ」と腹を立てた。

だがその考えだけではまだ50点だった。この手品にはまだ別の仕掛けがある。その正体は回転・・・即ち、腕から生えたサボテンのとげのような刃が一齐に腕を中心に時計回りに高速回転を始めたのだった。刃物と金属とかした右腕が激しくこすれ合い、火花をまき散らしながら回転するその姿は凶悪そのもので、ジンも思わずつばを飲み込んだ。いったい何を吸収したらあんな動きができるようになるのか甚だ不思議でならない。

「面白いだろお？ここに展示されている武器と車のエンジンを併用してこのように発動させるとこんなことも可能になる。全く素晴らしいよこのダイヤモンドの力というのは」

「まったく同感だな・・・羨ましすぎてゲロ吐きそうだ」

「嬉しいことを言ってくれる、ならせめて幸せのおすそ分けとしてこの武器の試し切りの的になってもらおうか！！」

目を見開くのと同時にグスタフが床を蹴り、ジンとの間合いと詰め攻撃を始めた。真横から一文字に迫ってくる回転する刃を受け止めるのは危険とみなしジンはバック転でその場を離れ回避する。的を外した凶暴な鋸は石の床を難なく削り、切り裂き、破片をまき散らしながらもう一度ジンを襲う。正面から突進してくる鋸を今の姿勢では回避しきれず、刀を抜き真横からはぎ払うと、思ったより簡単に鋸と腕が真っ二つに切断できてしまった。

これに気をよくしたジンがニヤリと不敵に笑むと、両の刀を抜いてグスタフへ突進、次は自分の番だと言わんばかりに刀を上段から振りかざす。

だがダイヤモンドの力をかなり甘く見ていた・・・切断された腕が一瞬で元の姿に復元し、再び火花を散らして回転を始めたのだった。今度不敵に笑むのはグスタフの方であり、ジンは万歳の姿勢を保ったまま体が宙に浮かんでいる。瞳の瞳孔が開くほど驚かされたジンの腹へ向かって再び鋸が突進してくる。

どうしようもないので予定変更、迫りくる鋸へ向けて刀を振り下ろし進行方向を強制的に変更させ致命傷だけは避けるように弾き返した。結果的に鋸の刃はジンの左腕と頬をかすかにかすただけで済んだが、この次がダメだった。

待ちぼうけを食っていた左腕が唸りを上げてジンの鳩尾を貫いたのだった。除夜の鐘の突き棒のような拳で殴られたジンは一瞬息がつまり、視界が真っ白になって吹き飛ばされた。

建物の壁を3枚ブチ抜き、4枚目の壁に全身をめり込ませてようやく動きが止まる。途端肺の中に溜まっていた空気が口から逆流し大きく咳き込む。今までに食らったことの無いような激痛に苦しみ、呼吸が整わなくなる。いくら空気を吸い込んでも肺の中に取り込まれるような感覚が一切なく、ただ口の中で酸素を循環させているだけの様な・・・そんな気分だった。

意識も飛びかけたがそんなことになったら間違いなく死ぬ、再び意識が蘇ることがなくなってしまったので急いでその場から烏合校としたが・・・やはり体がうまく動いてくれそうになかった。空気が吸えず頭もボーっとしてきた。これは非常にまずい。

「U R R R R R E E E E E Y Y Y Y Y Y Y Y Y ! ! ! ! !」

グスタフは奇声を上げながら回転鋸を振り回し、進行の邪魔になる石柱や壁を破壊しながら凄まじい勢いで迫り来た。動けないジンの頭に思わず「死ぬ」という単語が浮かび上がるほど危機的な状況、せいぜいできそうなことはと言えば目を閉じて歯を食いしばる程度だと考え、その通り実行した。

ギャルルルルルルル ・ ・ ・ ・

ドガシャアアアアアン！！！！

グスタフの奇声以上に大きな衝突音がジンの鼓膜を刺激し、その衝撃で閉じていた両眼を見開いた。正面に一瞬だけ映った光景は、外壁を破壊して屋内に突っ込んできた一台の車がグスタフを跳ね飛ばすという光景だった。

瞬きをした直後にはもうその光景はなく、目の前に現れた車がドリフトをしながらブレーキをかけ、タイヤから煙を上げながら停車した。

運転席のドアを内側から叩くように開いて真っ先に現れたのはドクターだった。どうやらドクターの方は目当ての品をかつぱらうことに成功したらしい。しかも今まで乗ってきたジープではなく4輪駆動のジムニーだった。

「大丈夫かメガネ君！？あまり心配をかけないでくれたまえ」

「うぐ・・・あが・・・」

口答えしようにも声が全く出ず、何を言っているのか自分でもわからなかった。身体の異常にいち早く気が付いてくれたドクターがさっそくジンの症状を診察すると、何を思ったのかジンの腹に一発拳を叩き込んだ。

一瞬目玉が飛び出してしまうかとも思ったが、次の瞬間喉の奥に詰まっていたような感覚が消え去り肺の中から空気が噴出、同時に呼吸ができるようになった。

「ゲホゲホゲホ！！テメエ、何しやがった？」

「キシシシ・・・息ができるようになったのだから君は小生に言うべきことがあるのではないかね？」

「ああもう、それは後回しだ後回し！」

全身の血管内に酸素を取り込むと簡単に体が言うこと聞いてくれ、安宿のベッドよりも固い壁のベッドから起き上がった。吐き出した地を拭ってチラリとグスタフを確認すると、やはりまだ奴は生きていたようだ。頭を軽く打ったのか首を左右に振って意識を確かめると、グルリとこちらを睨んできた。ご立腹なのは目に見えている。

「・・・やはりあの程度では死なんか」

「ヨシ、いっちょやるカ！」

続けざまに後部座席のドアが左右開き、二人の影がグスタフへ向かいまっすぐに飛来した。

右に虎眼、左に猫眼（服調達済み）、二人の拳が今ゴキッと骨を鳴らしグスタフの腹部へ直撃された。

曰く、「虎白爪撃限定奥義、双頭之虎」であった。二匹の獣の爪が直撃したグスタフは体をくの字に折り曲げ、そのまま正面より遙か彼方まで吹き飛ばされてしまった。威力は見ての通り、二つの拳でダイナマイトを表現しているかのような破壊力であった。

「ん・・・悪くない」

「ニヤハハ、でもやはり違和感はまだ強いネ」

「はあ・・・そうか？むしろ息ピッタリじゃねえか。結局同一人物なわけだし」

「そんなことはもうない。俺達はもう二人で一人の人間ではない」

「その通り！だからこれからは毎日ドクターとペタペタできるヨ！！」

「キッシッシッシッシシ・・・照れるねえ」

そう言いながらさっそく猫眼がドクターの背中に飛びついて両腕を巻きつけてきた。

まんざらでもないドクターは嬉しそうに笑うが、見せられる方はたまったものではない。という
か確か虎眼と猫眼は肉体の記憶を共有していると聞く。ということはいつも猫眼の姿になる度に
いつもあんな風にドクターと抱き合う姿を身体に記憶させられていたのかと思うと・・・なんだ
か気の毒な気がしてきた。辛かったろうに。

「お前ら、いつまでもバカップルしないでとっとと乗れ！！」

「さっさと逃げるさあ！！」

車に待機していたジェットとアゲートが窓から身を乗り出し大声を叫んでいる。グスタフが見えなくなるまで遠くに吹き飛ばすことができたところで到底安心できるような状況ではない。ならば急いでこの場を離れて遠くに逃げるのが最善の策である。

虎眼たちは急いで車に戻ると、エンジンをかけて車をいつでも走れる状態まで持ってきた。後はこのまま逃げるだけなのだが、それでもまだ車に乗ろうとしない奴が一人いるので車を出すことができない。

ジンだ。ジンは一人だけその場から動こうとせず、仁王立ちの姿勢をキープしながら遥か彼方に居るであろうグスタフの吹き飛ばされた方向を凝視している。見ているだけにあらず、何かを思考している。自分が今一番納得できることを考えている。

「メガネ君急げ！奴が追い付いてきたらもう逃げきれないぞ！」

逃げる・・・それだ。

今までピンチになったことなどいくらでもある。命を落としかけたことだって何度も経験している。自分が死んでしまう覚悟を決めたこともある、だが死のうと考えたことなど一度たりともない。

あの時確かに自分はビビってしまった、真っ先にアイツから逃げるように指示を出したのは自分だった。800mの高さから飛び降りてでまでアイツから逃げることを考えていたのはきっと自分一人だけだったかもしれない。

そう思うと何か腹の中でモヤモヤするものが立ち込めてくるような気がした。情けなく感じてしまった。負けることを、死んでしまうことを恐れて自分の中で言い訳をして自分の行動を正当化して誤魔化して、敵に背中を見せて真っ先に逃げだしたのは何を隠そうジン本人だった。

それが情けない、それが悔しい、それが憎らしい、それがムカつく・・・自分の気持ちに嘘ついて誤魔化してそれが一番正しいと信じていたついさっきまでの自分が最も腹が立つ。それが一番納得できない。

ではその嘘で固めた自分を一度完全に消し去り、一番自分が納得する方法とは何か？考えてみる。

・・・やっぱり答えはひとつだけかもしれない。否、これ以外ありえない。

「ジン！早く乗るさ！！」

「・・・ドクター、車出せ。オレが走って追いつけるくらいゆっくり走らせろ」

「そんなことをしてどうする気なんだい？いいから早く乗るんだ」

「いいこと思いついちまったんだよ・・・この現状を乗り切る、最高にハッピーな案だぜえ？」

ジンは自分の考えに従い、それを信じ、ドクターの癪に障るような嫌らしい笑みを浮かべた。「なんでこんないい方法を思いつかなかったんだ、馬鹿かお前は？」とジンの表情は語っている。それに気を悪くした運転席のドクターが言われた通りに車を発車させた。ゆっくりとエンジンを

回し徐行より少し早い程度の速度でゆっくり外へ向かって走り出す。車が発射したことを確認すると、ジンもその後ろを追いかけるように走り出した。

しきりにグスタフのいる方向を気にしながら、チラチラと背後を確認しながら走る。ドクターもそれに合わせているのかはたまた意地悪しているのか、徐々に速度を上げながら館内の廊下を突っ切って外へ出る。

ジンが息を切らしながら腕を大きく振って走る様を見ていられなくなったアゲートが車のバックドアを開き、手を伸ばしてきた。

「ジン何考えてるさ！？急がないと本気でヤバイさ！！」

「うるせえんだよ、んなことわあってらあ！！おいドクター！オレが合図出したらアクセルベタ踏みだ、いいな！？」

「心得た！君のそのハッピーな案とやら、信じていいんだね？」

「一個だけ教えてやる、オレを誰だと思ってやがんだ！！」

普段はこんなセリフ吐いたりしないのだが、この作戦を成功させるためにはこうするしかない。余裕を見せて全員を安心させる、今の所ジンにできる心理的作戦は成功したようだ。

ドクターはその言葉を信じてまた車を加速させる。いい加減ジンもこの速度に対して人力で追いつくことに無理を感じてしまうくらいの速さになり、走るのに苦痛を感じてきた。

そして待っていたこのタイミング、ギリギリ追いついたジンがアゲートの右手に向かい腕を伸ばす。するとそれに反応したアゲートもドアにしがみつきながら手を伸ばしジンの手を掴もうと必死になる。

あと少し・・・あと少しだけ・・・あともうちょい・・・そのままそのまま・・・・・・・・

「ジン、掴まれさあ！！」

「ぎぎぎぎぎぎ・・・おんどりゃあああああ！！！」

体内に残されているほとんどの力を振り絞り、ジンは跳躍した。その甲斐もあって、ジンとアゲートの手は完全に触れ合えるくらいの距離まで近づくことに成功する。ここですべての計画が順調でもある。

後は二人がお互いの手を掴み合えば・・・

パン！

そうはいかない。ジンが立てた作戦における最後の総仕上げ・・・それはアゲートの手を掴まずにそのまま平手で弾くこと。いわゆる力強いタッチである。おまけで最後に一言添えれば、すべて完了だ。

「後は頼んだぞ・・・・・・・・出せドクター！！！」

ジンの合図とともにドクターは迷わずアクセルを踏み、エンジンが生み出せるすべてのエネルギーを開放し走り出した。

瞬時にアゲートの手とジンとの距離はかけ離れ、あっという間にジンの姿は米粒ほどの大きさに

まで変わってしまった。

何が起こったのが理解するのに時間がかかり過ぎ、気が付いたころにはジンの姿はほとんど見えなくなってしまっていた。

「・・・！！？ドクターちょっと待つさ、ジンが・・・ジンが！！」

「・・・あの馬鹿が。構わんドクター、走らせ続けろ！！」

「極めて了解・・・飛ばすよ！」

ジンの行動を目撃した虎眼はこの時ジンの真意を悟り、あえて車を進めるように指示した。舞い上がる砂塵の影響で、ジンの姿は完全に見えなくなり一行を乗せた車は岩と砂漠の世界を走り去るのだった。

「ちょっと待たせ！！ジンがまだ乗ってないさ！！引き返せさドクター！！」

「アゲート、それは俺が許可しない。このまま俺達はアーウェンから脱出する」

「なんでさ！？だってジンが・・・」

バギャギン！！

聞いたことの無いような激しい打撲音が車内に響き、車が大きく傾いてしまったのはアゲートがシートに叩きつけられたからだ。

そしてアゲートを殴ったのは、虎眼である。

「貴様今のは見てまだわからないのか！！アイツがあの時、俺達に対して何をしたのかを見ていなかったのか！！アイツが何をしたいと思っていたのか知っているのか！！！！アイツが何でこの車に乗ろうとしなかったのか、貴様は理解できるのか！！！！」

虎眼が一行の目の前で、おそらく初めて感情を剥き出しにしてアゲートを叱咤した。と言っても、拳を食らったアゲートは今の一撃で意識が吹っ飛び完全にノビてしまっている。

代わりにその言葉は残りの3人の胸に重くのしかかる。違う、憤慨している虎眼自身の胸にもものしかかり、強く締め付けている。

グスタフに対し、自分の弱さはすでに認めている。だからこそ逃げるという選択肢を選び今こうして砂漠を走っている。

なのにジンは、自分の弱さを真っ先に認めたジンが逃げることをやめ・・・よりもよって自分達だけを逃がすために一芝居を打ったように虎眼は見えた。

悔しく思う・・・あの時あの場所にいたのがジンではなく自分であったならば同じことを考えることができただろうか？

否・・・確実に車に飛び込み、一目散に逃げ出していただろう。

肉体的な強さでグスタフに負け・・・精神的な強さでジンに負け、虎眼は自分自身を殺してしまいたいくらいに腹を立てている。拳を握る力が強くなりすぎて、爪で皮膚を裂き血が滴り始めている。

そして改めて思い知らされる・・・

自分は弱い・・・と。

石畳の街道の上をゴロゴロと転がり続け、ようやく止まった頃にはもう連中の車は見えなくなっていた。体中が悲鳴を上げ、口の中に入った砂がジャリジャリして気持ち悪い。

とりあえず作戦は思いのほか簡単に成功、ジンはその場で胡坐をかき体中にまとわりつく埃と砂を払い落とした。

やがて間もなくして、瓦礫の中から復活したグスタフがジンの背後まで歩いてきた。視線の奥には砂漠の向こうへ疾走する一台の車が見え、目の前にはジンが一人だけ。それを見て今ジンにおかされている状況を簡単に把握した。

「フフフフフ・・・仲間に見捨てられたか？」

「そんなじゃねえよ・・・俺が見捨てたんだ」

「私から逃れるためにわが身を犠牲にして仲間をできるだけ遠くへ逃がし、自分はその時間稼ぎのつもりか？」

「そんなじゃねえっつってんだろタ～コ」

あらかたの砂を払い終わったジンが立ち上がると、グスタフへ向き直りキッと睨みつけた。

「アイツらはたまたま一緒に旅をすることになった連中・・・言ってみりゃあれはただのツレ、運命共同体とも言うかな？それとも腐れ縁か？」

ジンは今まで意識的にあの5人を仲間だと認識した記憶がない。あくまであの連中はひとつの仕事における協力者、同僚に近い関係だと自負している。仲間とはもっと深い信頼関係を持つ間柄のことを指し、自分にそんな間柄は無いと認知している。

そこまで言うとはジンはグスタフから視線を逸らし、胸ポケットにしまっていたタバコに手をかける。一服付けようと思えば箱を傾けるが、生憎残っているのはたった2本だけ。よりもよってタバコを切らしていたとは、不覚であった。

仕方なくそのうちの一本を吸おうとしたら、その前に一つのタバコ箱が投げつけられてきたのをキャッチした。見たことの無い銘柄のタバコの持ち主はグスタフだった。

「貴様には冥途の土産をくれてやるなどもったいないと言ったが、撤回しよう。せめて最後に私の愛用している高級紙巻をくれてやる。本物のタバコの味を知っておくのは生きている上で財産にあるぞ」

どうせすぐに死ぬがな、なんて言葉を付け加えてグスタフは笑った。

死ぬとか死なないとかそういう話はあとに回すとして、せっかく貰った高級タバコなのでジンはさっそくそれを吸ってみることにした。

中身を一本加え、風をよけるように火元を手で覆って着火し、煙を肺の中奥深くまで吸いこみ、ゆっくりと吐き出した。

高級と呼ばれることはあるのか、今まで吸ったことの無いような味がした。

「・・・・マズ」

「？」

「何この紙巻、クソマズイったらありやしねえじゃねえか。『エクスプローダー』？値段ばかり意識しすぎて肝心の味がこんなんじゃあ、吸った本人は大損だわな。こんなもの吸ってる野郎の気がしれねえやな」

ジンは今吸ったタバコの感想を言いたいだけ言い切ると、まだ半分も吸いきらないうちに吐き捨て、封を切ったばかりのタバコの箱を残りの中身ごと踏みつぶした。そしてそのまま自分が愛用するタバコ、『ラピスラズリ』を一本啜えて火をつけるのだった。

「フウ・・・やっぱ貧乏人には貧乏人に相応しいタバコが相応しいやね、こっちの方が美味しい」
「初めて会った時から思っていたが、貴様は人との会話や親切におけるマナーと礼儀が欠如しているようだな」

「なんとでも・・・こちとら自由奔放、自由気ままが主義なものでね」

「親の顔が見てみたいものだ。それと分かっているのか、貴様が今日の前にしているのは仮にも神だぞ？そんな態度ばかりでは罰が当たるのではないか？」

「・・・それに関しちゃうオレも訂正することがあったんだわ。あんたは化物だって言ったこと、これを訂正しよう」

「ほうそうかい・・・何と訂正するのだ？」

「テメエはバケモノ改め・・・ゲテモノで決定だ」

・・・開戦の狼煙のつもりだった。

ジンが一番納得できること、それはたった一つのシンプルな答えである。

「気に入らない野郎は全員まとめてブツ斬る」

今までずっとそうしてきた、今までずっとそうやってきた。力の弱さを認めるのは正しいと思うが、それにいつまでもビビって震えて逃げ腰でいるのはただのチキン。自分は違う、この男は腹の底から大っ嫌いであるうえに、今までの中で一番気に入らない・・・たまたま強い力を得て調子に乗っている。

そんな野郎に一太刀浴びせて黙らせる、ここ最近そうやって生きてきた。

だからあの野郎をぶっ殺す。勝ち目がないとか勝率云々ではない、自分の意思に従い必ず殺して見せる。

「・・・・・・礼儀という物を教えてやろう、小僧」

「礼儀何か一日で忘れてやる自信がる・・・こっから先はオレとテメエの喧嘩だ」

「フン、戦いと喧嘩の区別もつかないような小僧が神であるこの私に勝てるか？」

「喧嘩だよこれは・・・主義も品格もルールも減ったくれもねえ、なんでもありの殴り合い・・・それが喧嘩って物なんだよ」

ジンは両刀を抜き、切っ先をグスタフの鼻っ面へ突きつける。グスタフは首を左右に振り軽くストレッチを始める。やがて右腕の回転鋸が火花を放ち、さっきと変わらぬ勢いで高速回転を始めた。

「始めようぜ・・・・・・ショータイムだ」

続

おまけ キャラクター詳細A

ジン・K・ジェイド

出身 ラプチナ大陸、クリスタル村

前職 家事全般作業

親族 父（母は他界）

身体的特徴 髪／黒、肩まで届くセミロングストレート

センター分け、額を広く見せるような髪型

服／黒いトレンチコート（イメージは銭形のとつあ）

黒い半袖Tシャツ、ロングブーツ（紐で縛るタイプ）

デニムパンツ（ストレート）

タバコ／銘柄は「ラピスラズリ」（マイルドセブン）、ライターはオイルジッポ

同じ肺がんにかかるなら質より量を吸うタイプ、ヘビースモーカー

普段はコートの内ポケット、又は胸ポケットに収納

アクセサリ／メガネ（赤、メタルフレーム、アンダーリム）

ウォレットチェーン（シルバー）

キャラクターイメージ ハセヲ

アゲート・モルガナイト

出身 ラプチナ大陸、パール村

前職 農業、畜産業、狩猟業

親族 母方の婆、父方の爺婆、父、母、兄2人、姉、弟、妹2人

犬3匹、猫2匹、牛5頭、鶏10羽、羊15頭、金魚3匹

身体的特徴 髪／茶、短髪、前髪長め、右の73分け

バンダナ／藍色のバンダナ、前髪を持ち上げるヘアバンドのような役割

細く丸めて鉢巻のように結ぶ、結び目は左サイド（サイドテールイメージ）

服／紺色のTシャツ、黒いベスト、丈の短いジャンパー

普段ジャンパーは着ずに腰に結んでいる

カーゴパンツ、コンバットブーツ

ブーツはベルト式（シートベルトと同じ仕組み）×縦4列

傷／幼少の頃家族（鶏）と遊んでいる時に反撃を受けてできた

顔の中心を横一文字

アクセサリ／ピアス（イヤードブ、二連リング）、右耳のみ

キャラクターイメージ 黄天化